

t'ien と kilien との間には、一見した所では可なり音聲の相違があるやうに認められるが、前に既に t'ien と khien とが同音の轉訛に過ぎないことを説いた自分は、khien を通じて見る t'ien と kilien との間に、しかく距離の存するものとは思はない、要は中間音として一箇の l の挿入されて居る丈の相違と見ることが出来る。今此の l の性質を見るに當つて、之と同様の例で既に先人の證示を経て居るものを借り來るを便利とする。説文に聿所目書也、楚謂之不律、燕謂之弗と見え、段氏は之に註して、一語而聲字各異也、釋器曰、不律謂之筆、郭云、蜀人呼筆爲不律也、語之變轉也というてゐる、聿、不律、弗、筆等が段氏の所謂一語にして聲字各異れるものなることは異論なき所で、筆 pit と不律 pu-lit との相違は、方音の變轉に歸せられてゐる。不律の二字で表はす音はかく pu-lit といふ複音であるべきであるが漢語が元來綴語であつたか否かについては、甚だ議論の存せる所としても、説文や爾雅の郭註の作られた時代の漢語に於て、筆を稱する方言に pu-lit といふ複綴語が存したと考へるのは如何であらうか、従つて當時吳蜀の地方に行はれた此の語を漢語の方言と見れば、之は pit の音を寫す爲に、一箇の漢字では表はし悪いところから、かく二字を用ゐたものと解釋しなければならぬ。古い漢語の頭音に p, k, t (b, g, d) 等の存したことは既に學者の説いた事で、近くは<sup>15)</sup> Karlgren 氏の如きもまた此の考を述べてゐる。然るに l といふ音はパラタリゼーションによりて j, ɲ などと同様の音に柔げらるゝ性質を有すること、諸國語に於て等しく認めらるゝところで、<sup>16)</sup> 大概の言語學の書物にはこの現象を論述してあるが、こゝには Jespersen の Lehrbuch der Phonetik, S. 134-135 の説明と例證とに従ふことを述べて置けば足りる。かゝれば不律は筆 pit の古き形、即ち pit の形を吳、蜀の地方に傳へたものか、もしくは吳、蜀蠻夷の地方に於ては pit が少しく變ぜられ、l 音を挿入して plit